



JAPAN URBAN DESIGN  
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都渋谷区広尾1-10-4  
越山L Kビル内 150

TELEPHONE 03-5420-5995

FACSIMILE 03-5420-5996

# JUDI NEWS

007 August 20.  
1992

発行者  
都市環境デザイン会議 事務局

- 3本柱からなる第2期活動方針..... 1
- 特集ランドスケープのフィールドから
  - 1 ランドスケープアポリア 上山良子..... 2
  - 2 デザインの復権をめざして 同時代風景'92展から 佐々木葉二..... 2
  - 3 西宮名塩ニュータウン斜面住宅地のデザイン 上野 泰..... 3
  - 4 「播磨科学公園都市」におけるピーター・ウォーカーのしごと 大塚 守康..... 4
  - 5 富田南北線アート壁の受賞を機に 佐野 寛..... 5
- 都市環境デザイン教育は大学で果してどこまで可能か..... 6
- 代表幹事会から..... 6
- 広報・出版委員会から..... 6



## 3本柱からなる 第2期活動方針

—第2期定例総会開かる—

土田 旭

AKIRA TSUCHIDA  
(株)都市環境研究所



■ 去る7月18日(土)、東京四谷のスクワール麹町において第2期定例総会が開催された。臨時総会から2カ月足らず、関西フォーラムが前週にもたれたこともあり、出足が心配されたが、60数名の出席(委任状を含めて165名)を得た。総会後のシンポジウムではさらに出席者を加え、その後の懇親会を含め盛会裡に終わった。

■ 今総会は始動期間ともいえる1年間を経て、本格的に活動を開始する第2期の体制と活動方針を決める重要な総会であったが、10名の新代表幹事(留任4名)、新監査役2名(留任1名)、12名の各ブロック幹事(各ブロック代表1名)が無事選任され新執行部が発足した。新役員については掲掲の通りであるが、中堅・若手の代表幹事を含め、分野別にもバランスのとれた代表幹事会構成になっており、今後のリーダーシップが期待される。

■ 菅新代表幹事より代表幹事会を代表して第2期活動方針が提案され、賛成多数で承認された。活動方針は次の3本柱からなる。

会員の積極参加を促すため、例えば小委員会活動等による活動を促進する。

### 2. 情報交換、相互研修の活発化

JUDIニュースに会員寄稿欄を設けるほか、各委員会活動を活発化する。また、年間スケジュールを定期化し、会員が余裕をもって参加できるようにする。

### 3. 都市環境デザインの社会的認知

そのときどきで話題になり、あるいは社会的に意見を提出すべき事柄について、まず例会・委員会あるいはJUDIニュース等で会員相互の意見交換を活発に行うようにするほか本会あるいは各会員が機会をとらえてアピールするよう努める。

■ ところで設立当初の会員目標は250名であったが、1年を経て314名を数えるに至った。今後とも入会者数は増えると思われるが、活動を積極化する上での課題の一つは、財政的基盤の強化である。会費の納入遵守、協力法人の増強等をもとより事業収入、広告収入等の方策を講じる必要がある。



代表幹事	幹事	
近田 玲子	矢島 健	(北海道ブロック)
林 英光	山崎 洋二	(東北ブロック)
大塚 守康	水野 一郎	(北陸ブロック)
高橋志保彦	岡村 勝司	(北関東ブロック)
南條 道昌	天野 光一	(東関東ブロック)
鳴海 邦碩	伊藤 洋	(南関東ブロック)
窪田 陽一	成瀬 恵宏	(西関東ブロック)
中野 恒明	森 延彦	(中部ブロック)
加藤 源	井口 勝文	(関西ブロック)
菅 孝能	寺本 和雄	(中国ブロック)
	大谷 英人	(四国ブロック)
監査役	岡 道也	(九州ブロック)
佐野 寛		
西沢 健		

### 1. ブロック活動と若手会員の活動の活発化

北海道、関東甲信越、中部および関西の各ブロックでは徐々に活動が軌道に乗りつつあるが、その他のブロックでは会員数の不足等もあり、ブロック活動が停滞気味である。そのため、代表幹事会のバックアップ、ブロック活動予算の確保等を含め、ブロック活動の活発化を図る。また若手

## 特集

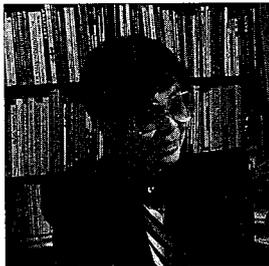
# ランドスケープのフィールドから-1

ランドスケープアボリア

## 上山 良子

RYOKO UEYAMA

(株) 上山良子ランドスケープ  
デザイン研究所



時代は大きくシフトしている。ロバートソンの言葉を借りると、「HEからSHEへ」。HEとはHyper Expansionist (過剰拡大主義)の頭文字を取り、SHEとはSane, Humane, Ecological (健康的な、人間的な、生態的な)の頭文字を取ったゴロ合わせである、時代を捉えた上手い表現である。テクノクラシー依存型から自己依存へ、人間中心から環境中心へ、都会的から田園的へと、HEからSHEへの領域は無限に拡大して考えられる。この時代的背景に於いては、我々の職域に関わる人々の志しが問われている。

場を読むことほどこの国に於いて、この100年間失われてきた事が他に在るだろうか。この能力は空間ばかりでなく時間もしかり。時がたてばたつ程美しくなる素材を扱うランドスケープの領域で、少なくとも数十年後、数百年後の完成時を考えて場作りを考える事がいかに重要かが認識されている。アーバニティーの高い街づくりから自然の保護と開発の

間で悩むルーラルな場作りに挑戦している我々は人間の存在そのもののエゴをエコシステムに包含出来るかと悩んでいる。1つ1つ都市の舞台装置を考えている時、エコロジーという概念は、そのまま存在するにはあまりに多くの事がExcessiveになりすぎた時代に入っていることを痛感する。

フランスの緑の党の思想のリーダーシップを取る、ガタリが主張するように、単に自然保護のみを、やみくもに唱う時代ではない。ガタリのエコゾフィーと名付けた3つのエコロジーの作用領域、つまり環境的、人間的、社会的なエコロジーが三位一体になった時、新たなエコシステムが、膨れ上がった人類と破壊された地表との接点に生まれ得るように思える。エコゾフィカルと言う言葉の中には、新しい歴史的文脈の中に於いて、場づくりに参画する職域の我々が取るべき観点が、包含されているということが出来る。

## 特集

# ランドスケープのフィールドから-2

デザインの復権をめざして  
同時代風景'92展から

## 佐々木葉二

YOJI SASAKI

鳳コンサルタント (株)



ランドスケープデザインとは何か?そのデザイン生成の基礎条件や、その社会的意義は?このような論議はすでに多くの言葉で語られてきた。しかし日本の現状では、様式の解釈、計画技術や概念論に終始し、デザイン論としてはいまだ成熟していないのではないかと。これらへの疑問から出発し、具体的な作品提起によってその主張と帰属のありかを明らかにしようと、アメリカで学んできた7人を中心に今年の5月~6月の約20日間、東京と大阪で展覧会とシンポジウム「同時代風景'92展」を開いた。

7人が独自に場所を選び、設計した作品は、川井由寛:新宿運河、佐々木葉二:植物都市、西田正徳:リメイキング日比谷公園、登坂誠:宇部市への贈りもの、ナンシー・フィンレイ:季節の時計、三谷徹:株式会社「千本桜」、宮城俊作:丘陵都市の原風景などで、模型やドローイングも照明や自然光を使う多様な提案であった。

シンポジウムは、荻原敬氏を司会に、パネリストとして東京は大野秀敏氏と上山良子氏、大阪は古谷誠章氏と上野泰氏を招き、我々提案者7人とのディ

ベート形式で活発な討論となった。

それらは概ね次の4つのテーマに分けられる。

第一は、ランドスケープデザインの形態論と近代主義との関係。自然と人間との本質的な関係のありかたを空間化することは、自然の模倣ではない。しかし、それは抽象化の過程を通じた社会的アートとして、どこまで近代主義が残した本質の課題に迫れるか?。第二は、自然を媒介としたデザイン表現がめざすものについて。機能や形態ではなく、感性を通して読み取られた環境が場所の成立条件になるためには、視覚操作だけではなくどのような幅広い表現手段で答えるべきか?。第三は、機能論とその定義。最後に、ランドスケープデザインの創造行為とその社会的役割について。デザイン行為は個人の感性に基づいて達成される。しかし、それはどのようにして社会的コンテクストを共有できるか?等である。この展覧会は、作品を通じてその価値観自体を論議の対象に取り上げたことと共に、シンポジウムで鋭い批判と忌憚のない反論が本音で語られたことも画期的であった。おかげで、日本のランドスケープデザイン分野の現状や克服すべき課題が、内、外部から見えてきて学ぶところが多かった。ランドスケープデザインは、土地利用図に緑被率何%と色塗りをする事ではない。エコロジー分析や社会調査という科学的決定論を越え、感性を通じて、人間と環境の関わり方を空間に定着する作業なのだとの確認は大きい。それが開かれた批評の場を積極的に持ち、個人の感性を磨くことによって、デザインは社会にも定着するだろう。



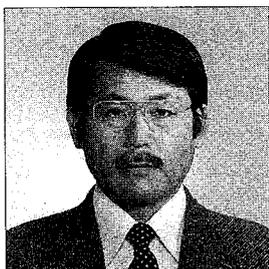
## 特集

# ランドスケープのフィールドからー3

## 西宮名塩ニュータウン 斜面住宅地のデザイン

上野 泰

YASUSHI UENO  
ウエノデザイン

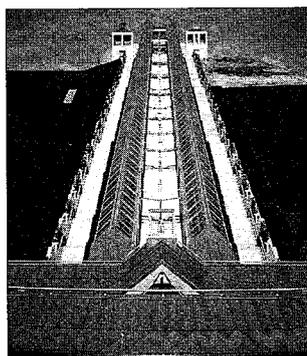


西宮名塩ニュータウン(「創造の丘ナシオン」)は、住宅・都市整備公団の新住事業によるニュータウンであり、JR宝塚線で大阪より約35分の位置にある。開発面積約243ha、計画人口12,000人とニュータウンとしては小規模ではあるが、僅か240ha強の敷地の高低差が約250m、平均斜度16度という、丘陵地開発というよりも「山岳開発」ともいべき地形条件の地区である。このような地形条件の地区では当然、不利用地率が高くなり、効率の悪い、しかも住環境としても決して良くない開発となりがちである。したがって、この開発では如何にして効率の良い、住環境としても魅力あるまちとするかが課題であった。しかし現実には、何とか得られた平地あるいは緩傾斜地を独立住宅及び学校、業務施設用地とし、残りの法面を集合住宅およびオープンスペースに充てたといっても過言ではない状況であった。(マスタープラン/市浦都市開発コンサルタンツ+ウエノデザイン)そのため、集合住宅地及びオープンスペースとして実態上の法面を如何にして活用するかの、具体的な計画上の「駒」の必要性が認識された。このような問題を検討する「モデル」として第1期入居エリアの集合住宅地(面積約30ha、計画戸数160戸、高低差約70m、傾斜20~27%)のマスターデザインがとりあげられた。ここでの課題は、従来の「中層住宅をそのまま斜面に寝かせたような」いわゆる斜面住宅で全体を覆ってしまうような計画は避けたいという点であった。そのために、ランドスケープ、建築からなるチーム(遠藤剛生建築設計事務所、造景:ウエノデザイン)が編成された。幸いチームメンバーの問題意識が接近していたため、全体を一つのMIX型開発とすることで方向が一致した。MIX型開発といっても、平坦地とは異なり、基盤、特に道路のあり方が問題となったが、長崎を始め内外の斜面のまちを参照しつつ、如何にして斜面の持つマイナス面を克服して、魅力ある「坂のまち」を創り出せるかが検討された。結論的には以下の諸方針と

してまとめられた。

- ①機械動線による骨格形成(マスタープランに基き斜行エレベーターを導入)
- ②肌目細かな区画街路の整備(斜面地への車のサービスの向上、処分し易い宅地規模への細分化への対応)
- ③住宅群を分節する骨格的オープンスペース(斜面の上から下まで連続するオープンスペース/ナシオン広場)
- ④多様なタイプの住宅の導入(民活による建設主体の多様化を含む住宅の多様化、形態の多様化)
- ⑤宅地内の変化に富んだフットパス
- ⑥絵になる風景の造出(特に外景との関係の重視、例えば大阪方面への眺望等)

以上のマスターデザインを受けて、道路、オープンスペース、斜行エレベーター等の設計、施行が進められた。それに引きつづき、第1期入居エリアの斜面住宅の設計が始められた。住宅地は大きく4ブロックに区分され、内3ブロックを住都公団が、残り1ブロックを三菱地所が開発する事となった。公団ブロックは遠藤剛生建築設計事務所と、坂倉建築設計事務所の2社によって設計されることとなり、これら3社の設計事務所によって、この斜面住宅が設計される事となった。設計を進めるに当たっては各建築設計事務所、各外構担当事務所、アドバイザーとして環境色彩研究所及び筆者、公団担当者からなる調整会議が持たれ、全体デザインの調整が行われた。デザインに当たっては、斜面全体を一つの集落としてとらえ、その中に多様なバリエーションが内包されているようなデザインを求めたが、或る程度の成果は得られたものの、結果的にはやはり開発主体別、設計者別のパッチワーク化という一般的状況を打ち破るには至らなかったといえる。やはり強力なコーディネーターなしではむずかしいのかも知れない。



△ 斜行エレベーター  
設計:遠藤剛生

住宅地の中心となるナシオン広場  
▽設計:ウエノデザイン+ヘッズ



RIERA I ARAGOによる「まちびらきモニュメント」  
背景の住宅は遠藤剛生建築設計事務所による公団分譲住宅 ▽



## 特集

# ランドスケープのフィールドから—4

「播磨科学公園都市」におけるピーター・ウォーカーのごと

大塚 守康

MORIYASU OTSUKA  
(株) ヘッス



### 1. 概要

兵庫県が21世紀に向けて進めている大プロジェクトである「西播磨テクノポリス」の中核が「播磨科学公園都市」である。山陽新幹線の相生から車で20分程の距離にある山間の、2,000ha強の学職住混合都市である。都市全体のデザイン調和を図るための「アーバンデザイン計画」を策定し、景観都市の実現を目指したもので、これには磯崎新氏の企画によって、カリフォルニアに本拠地をもちつつ国際的な活躍をしているピーター・ウォーカー氏が起用され、街づくりデザインの柱を作成することとなった。

### 2. 「アーバンデザイン計画」における情緒的表現

アーバンデザイン計画の冊子は、一般的報告書スタイルとはおおよそ異なり、ボリュームはないものを見るからにデザインのセンスを感じさせるものであった。印刷費もたぶん1冊数万円というオーダーであろう。A4縦2倍程のパール色の細長い冊子を開くと、やわらかな感触の上質紙に、各ページともパステル調のデリケートなタッチによるスケッチと、散文的な短い印象的なコピーがあり、それに細かい文字による説明が加えられている。いかにも理屈がなく感覚的表現によって、情報の伝達を図ろうとしていることが見える構成である。豊かな色彩はお見せできないが、そのスケッチの一部と、街のデザイン構成にかかわるコピーフレーズを抜粋して紹介する。尚、このコピーは詩人の高橋睦郎氏監修によるものだそうです。

- ・四方を山々に囲まれて、樹海という名の海に浮かぶ小島のように見える。
  - ・未知の聖域に向かうような体験をしながら到達する。
  - ・谷間の広がりを目にして誰もが覚える爽やかな解放感。
  - ・谷間の平坦地を南北に走る一本の曲がりくねった幹線道路。
  - ・相互に調和する土地利用は中心部に、特化された機能の土地利用は周辺部に。
  - ・地域全体を通じて、自然の地形、固有の植生を尊重。
- このような調子で、以後各部のイメージや生活像



が綴られている。

### 3. 各部の設計の特徴と問題

#### (1) 一連のオープンスペースの設計

ピーター・ウォーカー氏のオープンスペース設計の特徴を一言で表せば、実際に連続している空間や景観はすべて一連の設計としてあつかう、ということであった。これはあたりまえのように聞こえるかも知れないが、日本において土地利用、土地所有の一点鎖線を越えて設計を連続させることは至難の業

である。ワーキングとしては、一体化した巨大プランを各土地利用の事業に分割調整するという大仕事をかかえることとなる。

デザイン調整会において面白い現象が見られた。ピーター・ウォーカー氏から全体イメージの素晴らしいプレゼンテーションが示され、県の担当各位は賞賛をもって眺めるのだが、誰も自分の担当部分を指摘検討されていないので、各自の事業化への実感が得られなかったようだ。総論賛成、各論見えずといった状態が続き、結局のところ、個別の土地利用設計の検討の段階まで意見をいただけなかった。あらためて、我が国における一点鎖線の重みを認識することとなった。

#### (2) ディテールにおける風土性の問題

ピーター・ウォーカー氏は当プロジェクトにおいて、大きなランドスケープ以外にガーデン的な規模の作品もつくっている。ハイテクノロジーセンターの中庭では芝生の庭に苔と割石との円錐が並び、石と角材による直線が横切る彼独特のシャープな造形を見せている。

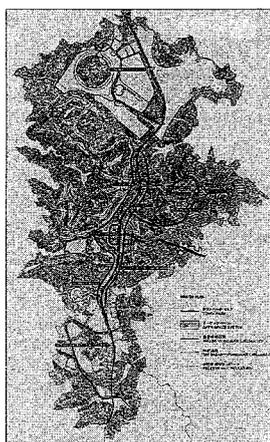
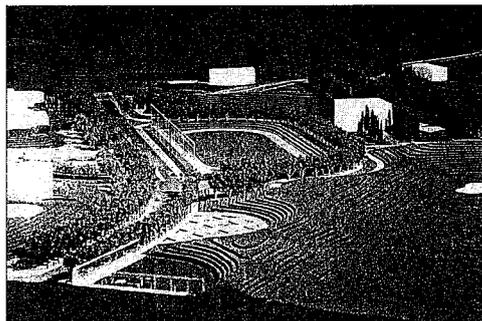
ここで、我々は、真夏の関西の直射日光に苔がもつであろうとか、逆に噴霧ノズルによってコンクリートの外壁に黴が湧かないかなどが心配になった。総じて光と陰しかない乾いたカリフォルニアと、湿度で光がイリュージョンする日本では、デザインの質が違うことが実感された。

#### (3) 造成面へのリフォレストレーション

木立の美しい桃源郷を目指す彼のランドスケープでは、造成面へのリフォレストレーションは必須であった。しかし、今の日本において、大面積の造成面にそれなりの森林を短期間に再生することは、技術的、経済的、管理上等、様々な面において、不可能に近いことであった。しかし、彼はカリフォルニアのレッドウッドの森が50年の歳月を経て、立派に再生されていることを熱心に説くのであった。我々にも50年、100年の計であれば、と考え直しつつも、日本の街づくりにおいて、そんなスパンで考えても良いのであろうかと心配になった。我々緑屋は本来のリズムを忘れ、現代の経済スピードに合わせすぎたのであろうか。

最後に、アーバンデザイン計画の終版の言葉を借りておわりとする。

- ・この街はそれをとりまくスギ樹林のように、全体として成長し続ける。
- ・すべての建設が完了した時、この街は森の中の都市であるはずだ。



## 特集

# ランドスケープのフィールドからー5

営団南北線アート壁の  
受賞を機に

## 佐野 寛

HIROSHI SANO  
クリエイティブディレクター



営団地下鉄南北線駒込駅アートウォールにイラストレーター舟橋全二氏が描いた作品が、6月に発表された第7回C Sデザイン賞の大賞に選ばれた。その製作に関わった一人として、報告かたがた、公共スペースの演出について一言したい。

南北線は全駅のプラットホームにホームドアがつく営団としては初めての路線で、基本計画を作成したのは仙田満十環境デザイン研究所。私は仙田氏から要請され、ホームドアの対面に広がる壁（アートウォールと名づけた）と、改札前面の名所等の解説を入れた壁（メディアウォール）の構想、それと色彩計画の一部を、モス・アドバタイジングの原田照也チームと一緒に担当した。以下、アートウォールについてのみ言うが、ラッシュアワー時に乗降客の安全を守るためのホームドアは、天井が低くただでさえ狭く感じるプラットホームの空間を、いっそう狭苦しいものにする。その閉塞感を払拭し、明るく爽快な空間に感じさせることが、われわれに与えられた目標だった。

閉塞感は、ホームドアが壁のように存在することから来る。もしもホームドアが、窓のようにそこがあれば、人々の気持ちは窓の外に向かうだろう。そして窓の外に、明るく爽快で楽しいイメージがあって、それが人々の気持ちを受け止めれば、閉塞感は消え、空間の印象も明るく爽快なものになるだろう。という、きわめて単純明快な考えを、われわれはまず、われわれの方針にした。そしてその「明るく楽しく爽快なイメージ」として、そういうイラストレーションがいいだろうと考え、舟橋全二氏のそれをはじめとする4例を試作し提示したのである。

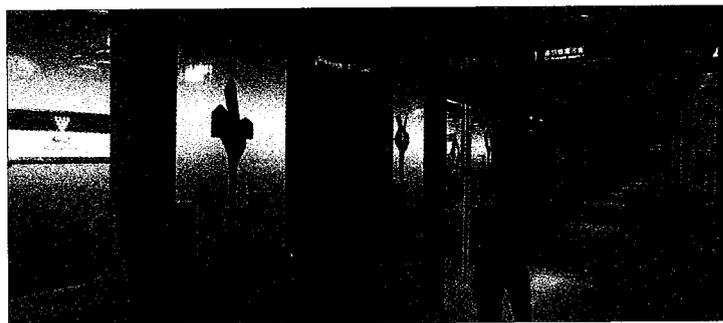
アートウォールにはもう一つ条件があった。施工費を負担するスポンサーを見つけることだ。結果、第1期7駅の中で駒込駅にだけスポンサーがついた。

日本たばこ産業＝JTである。たまたまJTの広告を舟橋氏が手掛けていたこともあって正式に彼が起用され、図版のような、なかなかの作品ができた。それが前記の大賞に輝いたのだ。

で、駒込駅の他、王子駅にもアートウォールができた。こちらの方は営団がスポンサーなしでつくった。今後できる駅のスポンサーのために、イメージの方向と幅を具体的に示すためである。「メトロ・ガーデン」という題のアートウォール。イラストレーションは基本計画づくりもしたモスの古田和子。評判は駒込駅に劣らずよい。

地下鉄という都市型交通機関の空間演出は、私にとって初めての体験だったが、そこで感じたことを一つだけ。もともと私は、橋の袂や駅前広場に置かれる彫刻の類に疑問を持っていた。コンコースなどの壁の絵や陶板画はなおさらだ。それが表現主義的な絵であれば、画家の「思想感情」の押し付けになるし、具象的な絵であれば、常識的な「芸術」の押し付けになる。子供の絵などの場合は、常識的な「微笑しさ」の押し付けだ。自己主張の強すぎるもの、個性のありすぎるもの、ステレオタイプを押し付けるものなどは本質的に、公共空間には向かないのではないかと。都市の公共空間は、野性動物にとっての自然環境と同様、人間にとっての「選択できない環境」なのだ。そこにおける「表現」は、万人にとって（おそらくその本能にとって）快いものであるべきではないか。

と、考えていたために、イラストの選択は難しかった。にもかかわらずインパクトも必要で、たんに謙虚であればいいという訳ではないからだ。結果は何とか成功したが、例えば駅前広場ではそれはどう「変奏」すればいいのか。私にとっての新しい課題である。



## 都市環境デザイン教育は大学で果してどこまで可能か

「都市環境デザインをめぐる職能教育・活動領域」シンポジウム

## 代表幹事会から

加藤 源

GEN KATO

(株)日本都市総合研究所

第2期定例総会の後、表題のシンポジウムがもたれた。司会の篠原研究・研修委員の趣旨説明の後、大学教育に携わる5名の会員がパネリストとなり、各大学の都市環境デザイン教育の体制と実体が紹介され、各パネリストおよび会場から卓抜な意見が出された。

建築(大学系及び芸術系)、土木、造園、プロダクトデザインの各分野がどのような教育を行っているか、なんとなく理解しているようであり分かっていないことが分かり、各分野間の情報を進める必要が痛感されると同時に、実務に携わるものの感想と教育に携わる者の意気込みとの間に多少のずれがあるようにも思われる。いずれにせよ、一回のシンポジウムで結論が出るようなものではなく、今後も関連企画のもたれることが期待される。なおシンポジウムの内容は、次号以降に掲載する予定である。

7月18日に開催された第2期の定例総会を受けて、総会において選任された代表幹事が8月4日に早速集まり、第2期第1回目の代表幹事会を開催しました。主要な相談、決定事項は以下の通りです。

### ① 代表幹事の担当役割

総会において諮りました通り、本会の活動、運営をよりスムーズに進めるために、第2期からは代表幹事の数に10名を増やし(従来6名)、様々な役割を分担することとしていましたが、各役割をそれぞれ以下の代表幹事が分担することになりました。

- 総務(本会活動全般の総務、庶務)：  
菅 孝能、大塚守康、加藤 源
- 企画(委員会活動の企画、調整等)：  
南條道昌(事業委員会)、窪田陽一(研究・研修委員会)、近田玲子(広報委員会)
- 運営(ブロック活動の支援、連絡調整等)：  
林 英光、嶋海邦碩、中野恒明、高橋志保彦

### ② 代表幹事会の定例化

毎月第1金曜日午後6:00~とすることにしました。代表幹事会に相談がある場合には上記の定例会

にに合わせて事前に連絡下さい。

### ③ シンポジウムの講師の謝礼等

これまでシンポジウム等の講師の謝礼について明確な規定を設けておりませんが、今後は以下の通りとすることに決めました。

会員が講師になった場合:10,000円

非会員が講師の場合:30,000円(別に旅費・宿泊費)

その他、代表幹事会、全国ブロック幹事会、委員会に出席するに際しての旅費、宿泊費についても一定の距離を超えた場合に支給することも決めました。

### ④ 年間スケジュール

(各ブロック活動について連絡願います)

本会の活動を活発にするとともに、催し事等により多くの会員が参加できること等を狙いとして、総務担当代表幹事において会の活動に係わる包括的な年間スケジュールを作成することになりました。各ブロックや会員において企画される催し事もスケジュールに載せ、早い時期から広く会員に知らせようと考えています。各ブロックにおける活動予定等について9月中旬頃までに事務局に連絡下さい。

## 広報・出版委員会から

みなさんからの  
情報発信!  
歓迎します。

JUDI NEWSは、会員の寄稿を歓迎していますが、残念ながら、ほとんど寄稿がありません。

この号の上山良子さんの小論には、強いメッセージがあります。たとえば、このメッセージへの反応として寄稿があれば、会員間のクリエイティブな討議へと発展させられると思います。問題提起、プロジェクトの報告、職能上の課題その他、自由な寄稿をお待ちしています。

JUDI  
NEWS

007  
August  
1992

## 編集後記

JUDI NEWSも2年目に入り、新しい編集方針を考えたいと思っています。とりあえず、紙面のレイアウトから刷新を試みています。提案を歓迎します。

【林 泰義】

## 広報・出版委員会

井口勝文	上野 泰
江川直樹	大塚守康
榊原和彦	佐野 寛
菅 孝能	近田玲子
嶋海邦碩	林 泰義